

# 農を生産業から、めぐみ返しにする

—みどり戦略を深く思想化すると—

講師 宇根 豊 氏

(農と自然の研究所代表)

[令和7年7月10日開催]

解題 岩元 明久



**田家** 日本農業研究所の第2回講演会を開催します。

今回は、福岡県から宇根豊氏をお招きしまして、お話をさせていただきます。宇根氏は、ご自分の農に関するお考えに沿った農業生産を実践されるとともに、『農本主義のすすめ』（ちくま新書）、『農はいのちをつなぐ』（岩波ジュニア新書）など多くの著作をお持ちです。

宇根さんにつきましては、岩元研究員による講演会の案内文（別添資料4）で簡潔な紹介をされております。参加の皆さんはそれをお読みいただいていると思います。また、6月16日付の日本農業新聞の「論点」（別添資料3）でもお考えを述べられております。

従って、通常私が講演者を御紹介するのですが、それは省きまして早速お話しさせていただきたいと思っております。

講演会は2時間程度を予定しております。宇根様にお話しいただいた後、質疑の時間を持たせていただきたいと思います。質疑の皮切りは恒例によりまして、本日の講演の解題をお願いしている岩元研究員に行っていただきます。その後、参加者の皆様から質問などを出していただきたいと思います。

では、宇根さん、よろしくお願ひ申し上げます。（参考資料：別添 1『農を生産業から、めぐみ返しにする一みどり戦略を深く思想化すると一』）

## I 講 演

**宇根** 皆さん、こんにちは。今紹介していただきました宇根と言います。福岡県の糸島市というところで百姓をしています。元は農業改良普及員をやって県庁に勤めていましたが、49歳のときに退職してNPO法人「農と自然の研究所」の運営を、百姓をしながらずっとやってきました。このNPO法人は既に解散しているのですけれども、今は任意団体として引き継いでやっています。

今日は「めぐみ返し」という聞き慣れない言葉について話をしたいと思うのですけれども、この「めぐみ返し」についてちゃんとした話をするのは、実は今回が初めてです。だからうまく話せるかどうか自信は全くありませんが、よろしくお願ひします。

もう十数年前ですが、百姓の友達が私の話を評してこう言いました。「宇根

さん、あんたの話は面白いが役立つことはほとんどなかった」と言うのです。ずばり核心をついているなと思います。それ以来、役立つ話はあるだけしないようにしようと心がけて、役立たない話に磨きをかけようと思って今日まできました。ですから、今日も役立たない話を一生懸命語りたと思います。

自己紹介も少ししておきたいと思いますので、資料（別添資料1）の1のところを見てください。

私、若いとき、農業改良普及員（福岡県庁）でありながら減農薬運動をやっていました。普及員になったとき、何でこんなに百姓は農薬をいっぱい振るのかなと疑問でした。それと先輩の普及員は何で農薬をこんなに散布させるのかなと、これも疑問でした。大学時代はできるだけ農薬を使わない。そういった勉強をしたり、グループにも入っていましたから、農薬をできるだけ使わないような指導ができないかと思っていたのですが、全くできませんでした。当時農業試験場もそういう研究をやっていませんでしたから。ただ、百姓自身はもう有機農業の取組は結構やっていたのです。

私が本当に目覚めて救われたのは、九州大学の後輩なのですが八尋幸隆という有機農業をやっている百姓との出会いです。彼は私にこう言いました。「宇根さん、あんたたち普及員は農薬を振らせ過ぎる。俺は野菜は無農薬、有機農業でやっている。稲も普及所、農協がつくっている防除暦の3分の1ぐらいで済ませている。できれば稲も無農薬でやりたいのだけど、あなたじゃ指導は無理だろうな」と言われました。ぐさっときました。思い当たることばかりです。つまりどこから農薬を減らせばいいかというヒントが、そこでやっと見つかったわけです。彼に提案をしました。「よし、分かった。あんたの田んぼでどこまで農薬を減らせるか一緒に研究をやろう」と言うと、彼はオーケーを出してくれました。そして彼の田んぼで研究を始めたのですが、もう初年度から無農薬でできました。それから農業指導ということの可能性に目覚めました。

農業指導というのは百姓の力を借りなければできない。そして農業指導というのは、百姓の力さえ借りれば試験場とか大学とか農水省とか県庁が言っていないこともできるのだというのが、私の普及員時代の最初の目覚めです。

そして次の目覚めは、八尋さんたちと一緒に虫見板をつくったということです。後で知ったのですけれども、農業試験場も前からこういうものは使って

いたのだと批判が出てきました。粘着板というのがあったのだそうです。ごきぶりホイホイとか、ベロツと剥いでペタツとくっつくものです。スプレーでシュッ、ペタペタと吹きかけて、稲の根元に当ててポンポンとたたく。「宇根さんは虫見板を自分たちが発明して広げたいみたいに自慢しているけれども、国の農業試験場ではとっくに使っていた」という批判がありました。私は反論しました。「あなたたちがやっているのは試験研究のデータを取るための道具ではないか。それは一回きりだろう。私たちは百姓が毎日使う道具として発明した」のだと。虫見板をポンポンと使ってみて、あとはポンポンとたたいておけばまた何回も使えるわけです。百姓は自分の目で見て何十か所でも何回でもずっと使えるわけです。もし試験場がそんなに便利な道具を使っていたのだら何で百姓に普及しなかったんだと思いました。そこなのですよ。試験研究と百姓の道具の使い方の違いは。

ですから、そうやって虫見板をつくり出したのですが、最大の発見は百姓があるとき、「宇根さん、この虫は何か」と言うわけです。私もその虫の名前を知りませんでした。勉強していますから害虫は大体分かります。益虫も大体分かります。害虫でもない、益虫でもない虫なのです。後で知ったのですが、トビムシという2ミリぐらいの小さな虫だったのです。秋になると、この虫見板の上に下手すると500、600匹乗ります。ちょっとびっくりします。数は害虫どころではないです。こんなにいっぱいいる虫なのに普及員のあんたは知らないのかとなるわけです。私も知らないぐらいだからただの虫でしょうと冗談で言っていたら、百姓たちが、あれはただの虫と言うらしいと言い始めて、そうか、害虫、益虫でもないやつは「ただの虫」って名前をつけたらいいかもなど思って、それから「ただの虫」という名前を使い始めたのです。

でも、これは私にとって大きな転機になりました。農薬を減らさなくても、田んぼで一番多いのは「ただの虫」です。「ただの虫」にまなざしを向け始めたということは、やっとなんぼ全体が見え始めたということです。それまで害虫と益虫しか見ていなかったわけですから、圧倒的に多い「ただの虫」にやっとなんぼ全体を見え始めたということは、私にとって田んぼの環境、自然環境全体が見え始めたということです。それから環境問題、自然環境に対して目覚め始めました。

そして「ただの虫」の調査をし始めたのですが、今でも病害虫防除所という組織があります。私も退職してアルバイトで病害虫防除所の調査を5、6年ぐらいやっていたのですけれども、「ただの虫」も調査してデータを全部上げると防除所の職員は、「宇根さん、無駄なことをしないでください。「ただの虫」は病害虫調査の中には対象として入っていません」と言うから、「でもただの虫も調査しないと本当のことは分からないのではないか」、「いやいや、私たちにはそういう視点はありません」と言われました。残念ながら、「ただの虫」というのは今でも調査されていません。

「みどり戦略」で今から本当に自然環境にやさしい農業にするのならば、病害虫防除所とか普及センターとか農業試験場とか、もっと本気で「ただの虫」を調査したり研究したりすべきでしょうね。そうやって視野を広げておかないと、この戦略はなかなか難しいのではないかなという気がしています。

県庁を49歳で辞めたときに、よし、「ただの虫」をしっかり研究するNPOをつくろうということで始めたのが生きもの調査です。最終的には5,668種類、田んぼの動植物全てをリストアップしました。そして日本全国のどこにいるのか、どういう生態なのかを分厚い本にして出版しました。それができたから「農と自然の研究所」はNPOとしては解散したのですけれども、5,668種類は琵琶湖博物館にデータを全部引き継ぎました。琵琶湖博物館で改訂作業をずっと進めて今6,200ぐらいに増えています。ありがたいなと思います。5,668種類、500ページぐらいある分厚い本を国の研究者も大学の研究者も、120、130人ぐらいが協力して出来上がったリストですから、私一人でつくったわけではありませんので信用してもらっていいです。

何種類ぐらい知っているかなと思って1種類、1種類ずつチェックしていくわけです。二重丸、一重丸、うーん三角、バツとつけていくのですが途中で眠たくなります。だから1週間ぐらいかかりました。私がよく知っている、自信があるというのは大体720種類ぐらいでした。残りは知らない、自信がない。「でも宇根さん、720種類知っていれば多いほうですよ」ってよく言われます。今の百姓は何種類ぐらい知っていると思いますか。福岡県で調査した限りは大体150種知っておればいほうです。

ところが、有名な宮崎県椎葉村で焼畑をやっている椎葉クニ子さんという人

は、600種類ぐらい知っているという聞き取り調査があります。彼女は特別だと思いますが、昔の百姓は500種類ぐらいの名前を呼んでいたということです。現在はここまで衰えてしまっている。生物多様性とか自然環境にやさしい農業とか言うけれども、自然環境は生きもので満たされているわけですから、生きもののお名前を知らない、呼ばない、まなざしを向けられないような百姓では、本当にそういう農業を支えられるのだろうかと思います。

ですから、生きもの調査では何を狙ったかという、百姓のまなざしをもう一回、役に立たない「ただの虫」も含めて生きものたちに向けさせるためのトレーニングでした。生きもの調査をやってきた百姓たちは口をそろえてこう言います。生きもの調査を経験すると、田んぼに行ったときのまなざしの向け方が変わってしまったと言います。今まで見ていなかった世界を見るようになった。「あっ、水の中でゲンゴロウの幼虫が泳いでいる。イトミミズがいっぱい生まれてきている」、今までは、「あっ、水がたまっているな」、で終わりだったのが、水の中の生きものまで見るようになった。こういう変化が生まれてきたと思います。

それは本来、百姓が無意識に持っていたまなざしなのではないか。無意識に百姓は自然環境に目を向けているのだというところが今日の隠れたテーマになるのですけれども、これが農業技術では見えてこないです。

例えば農業技術というと私が好きなのは武谷三男の技術の定義。もう今では古びていますが、当時はこの技術の定義が一番いいなと思っていたので覚えているのです。「技術とは客観的法則性の意識的適用である」というわけです。この定義は格好いいですね。でも百姓仕事にはほとんど当てはまりません。近代的な農業技術には当てはまると思います。まず、客観的法則性なんていうのを意識して、百姓は農業技術を行使していると思いますか。あるいは百姓仕事をやっていると思いますか。百姓仕事に没頭したときは我すらも忘れるぐらいですから客観的法則性なんて、もぬけの殻、全く意識していないでしょうね。

それから意識的適用。問題はここです。工業技術では意識的に適用しないと危ない。まずいいことになるとは思います。百姓仕事の場合は意識的に適用しないほうがいい仕事だ、熟練した仕事だ、慣れた仕事だと言っていると思います。

このことで私が目覚めたのは、オタマジャクシのせいです。あるとき我が家

の田んぼのオタマジャクシが全滅しました。うっかり水を切らして田んぼ1枚、完全に水が干上がりました。上流からビニール袋が流れてきて、水口にピタッと張りついているものだから、水が全然入っていないのです。一番上の田んぼは完全に干上がっていました。オタマジャクシは全滅です。1泊2日で旅行をしていたものですから、もう本当に悪かったなと思いました。

私の田んぼにオタマジャクシは何匹ぐらいいると思いますか。大体1株の周りに10匹ぐらいは確実にいます。1反だったら2万株ですから20万匹です。20万匹のオタマジャクシが死んでしまったわけです。これにはまいりました。このことを百姓の友達にするとみんな、「いや、俺もそういう経験はある」と。ほとんどの百姓がそういう経験を持っています。そのときどう思ったか。みんなこう言います。「悪かった」って、オタマジャクシにわびたと、ほとんどの百姓が言います。

そこで私はいじわるな質問をします。「あなたたちはオタマジャクシのために田んぼに水をためているのか」と言うと、百姓たちはみんな否定します。「いや、オタマジャクシのためにためているつもりは全くない。あくまでも稲のためにためているのだ。草が生えにくいようにためている」のだと言います。では何でオタマジャクシに謝るのか。「いや、生きものが死ぬと悪いと思うよ」と。オタマジャクシはあなたが稲のためにためた水によって生き長らえて、すくすく育ってカエルになっているわけだろう。ということは、あなたが稲のために水をためるといふ仕事によって、その技術によって実はオタマジャクシも生を全うできる。つまり水を溜めるといふ稲作技術には、あなたたちが意識していない目的が含まれているのではないか。でも意識しないと言いながらオタマジャクシが死んだら、「ああ、ごめん、悪かったと無意識の世界から浮かび上がってくるものは何なのだ」と言っても、反応は鈍いものです。私に言わせるとそれは生きものへの情愛でしょうね。

この生きものへの情愛、オタマジャクシへの情愛は仕事の中に、技術の中にどう埋め込まれているのか、という着眼が生まれたのです。こういうものを考える癖がいつの間についているという感じです。オタマジャクシが死んだ、「ごめん、悪かった」。ほとんどの百姓はそれでおしまいです。いや、それをおしまいにしたらいけないのではないか。おしまいにしてしまうから上辺の技術の限

界が見えない。技術の中に、仕事の中にもっと深く下りていって、無意識の層まで下りていくと、そこにあるものは何なのだ。生きものとの本当に深いつながりが見えてくるのではないか。それは技術の定義ではつかむことができない。これをつかむような哲学が必要なのではないかと気づいたわけです。

何で私がこういう変な着眼を持つようになったかという、実は自然という言葉の来歴を知ったときです。32、33歳の頃でしたけれども、『翻訳語成立事情』という柳父章さんの岩波新書を読んだときです。本当にショックを受けました。自然という言葉には主に2つの意味があります。今日はまだ寝ている人がいないからほっとしていますが、自然と眠たくなる時の自然と、ここは自然環境が豊かですねという時の自然。後のほうの自然はNatureの翻訳語です。しかも明治20年代以降になってやっと定着した。

百姓の使い方を調べていると、百姓が自然、自然と言いだめたのはほとんど戦後です。つまりNatureの翻訳語としての自然が本当に定着するのは最近の話だと。でも今はもうみんな自然というのは普通に使っていますよね。そのとき私は目覚めました。このことを知らなかったからです。

Natureの翻訳語の自然を使うと、自然を外側から見ることができます。でもその言葉が江戸時代までなかったわけです。明治中頃ぐらいまでなかったのです。その頃、百姓はどう見ていたのでしょうか。自然という言葉を知らなかった。自然とそうなるという言葉ももちろんあったのだけれども、これも中国の荘子たちがつくった言葉を古代の日本に持ってきたのです。江戸時代は自然(Nature)という言葉を使うことがなかった。必要なかったということは、自然を外側から見ることがなかった。その必要性を感じなかった。それはどうしてか。内側からしっかり見ていたということでしょうね。

そのときに私は新しい言葉を見つけました。「内からのまなざし」と「外からのまなざし」。百姓は専ら「内からのまなざし」で見る。だけれども、自然科学は専ら「外からのまなざし」で見る。友達のある学者が私のところに遊びに来て、しばらく私の仕事を眺めていたそうです。そして私のほうに寄ってきて、「宇根さん、久しぶり」、「おお、もう来てたのか」、「さっきからあなたの仕事ぶりを見ていたら単純作業の連続ですね」と彼は言うわけです。いや、私は単純作業とは思っていません。もちろん外から見たら単純作業かもしれない

けれども、仕事に没頭して本当に楽しんでいるのです。でも外から見ると単純作業としか見えない。内側から見ると草に触れながら、草と話をしたり、本当に仕事に没頭して我すらも忘れるぐらいの境地になっているわけです。ここだと思いましたね。「内からのまなざし」と「外からのまなざし」、どちらも大事なのだと。両者を出会わせるような哲学が必要なのだ。農業の世界では両者を出会わせるような哲学が今までなかったのではないか。よし、それをつくってやろうと思いました。

ところが、このことをとっくにやっていた人が数少ないですけれどもいたのです。1人は、安藤昌益。安藤昌益が何でできたかという、百姓でなかったからできたのです。でも百姓に一生懸命寄り添おうとしています。安藤昌益の『統道真伝』とか『自然真営道』を読むと本当に難しいです。でもずっと読んでみると、難しいことは何も書いていないです。当たり前のことばかり書いています。ただ、現代人から見ると表現が難しい。今日の資料にもちょっと引用していますが、安藤昌益は医者だったし、百姓でなかったから外側から見ています。でも百姓に本当に寄り添って、百姓の話をしっかり聞いて内側からの見方も知っているのです。感じているのです。だからああいう文章になる。

もう一つは、昭和初期の農本主義者です。橘孝三郎は茨城の百姓でしたけれども、彼は左翼に対抗するために一生懸命、マルクスもしっかり読んでいます。だけれども、彼はマルクスが大嫌いですから左翼でない新しい思想をつくらうとして一生懸命になっています。だから外からの勉強、まなざしもしっかり身につけておきながら、一方で百姓をしながら「内側からのまなざし」も身につけているのです。

その結果、彼は「農業は資本主義に合わない」と言っています。その理由がふっています。百姓の相手はほとんど生きものだと、生きものは経済で生きていないというわけです。これこそ、「外からのまなざし」と「内からのまなざし」の出会ったすごい思想ではないでしょうか。だけれども、農本主義というのは戦後散々です。右翼反動だ、ファシズムの温床だとめちやくちや言われて、本当に農本主義者たちが言いたかったことはほとんど捨て去られてしまいました。それではいけないと思って、一時農本主義の本を探して読みこみしました。

農本主義の本を4冊も書いたのです。入り口に並べていますけれども、『農本主義のすすめ』が一番易しいですが、一番本格的な本は『愛国心と愛郷心』です。農本主義を現代によみがえらせないといけないと思ったのですけれども、私の着眼は今言ったところです。農本主義というのは、「外からのまなざし」と「内からのまなざし」を架橋しようとした。ただ、不十分でした。なぜか。五・一五事件、ああいうものに引きずられてしまったのです。もし橋孝三郎がああいう事件に引き込まれなかったら、もっと農本主義は花開いたと思います。でも農本主義者のいいところはそこなのです。宮沢賢治や当時の左翼にも言えることですけれども、自分の幸せよりもみんなの幸せを考えてしまうのですよね。つい自分の幸せ、自分の仕事を置き去りにして突っ走ってしまうところがありました。農本主義の思想は戦後、花開くことはありませんでした。だから少しでも花開かせようと思って本を書いたのですが、一番の理由は今言ったようなことです。

さて、ここまでが前口上です。今から本題に入ります。つまり今から話す話は「内からのまなざし」と「外からのまなざし」を橋渡しする。架橋することなのですが、あくまでも「内からのまなざし」に軸足を置いて「外からのまなざし」も利用する。そういうスタンスになると思います。

「みどり戦略」にはすごく期待しています。いろいろ批判はあります。どこに一番期待しているかということと2050年の目標ということで、2050年という年代を挙げたことです。これもヨーロッパの受け売りかもしれませんが、少なくとも日本の農政で何年までにこうすると打ち出したのは多分初めてでしょう。有機農業を25%にする。ヨーロッパは2030年までにそれぐらいにしていると言っているわけだから、ヨーロッパに比べたら遅れていると批判するのは簡単です。2050年までにこうしますということは、2050年はどういう社会になっているだろうか、と。25年先ですから私はもうとっくに死んで居ませんが、それでも想像するのです。思い描くのです。このことが大事なのではないでしょうか。国民全体に、百姓全体に25年後はどういう社会になっているだろうか、どういう農業であるべきだろうかと思わせるきっかけとしてはなかなかよかったと思います。

それをもっと前面に出して展開していかないといけないと思います。25年

後、あなたはどのような人生を送っているのか。農水省の「みどり戦略」は、特に若い人に対して言うべきです。どういう社会にしたいのか、どういう農業にしたいのか。あなたの、一人一人の構想を語ってください。それをみんなで語り合おうやと。そのようになっていけばなかなかいい戦略になると思います。が、残念ながらそういう戦略、戦術がないです。これがもったいないと思います。

「みどり戦略」は、まだまだ「外からのまなざし」に軸足を置き過ぎています。地球温暖化対策、カーボンニュートラルという目標、本当に「外からのまなざし」ですからね。「内からのまなざし」も、この「みどり戦略」の中に入れていく。多分農水省の人たちがやることではなくて、百姓一人一人が入れ込んでいくような動きに加担していく、参加していく、関わっていくような戦術、システム。そういう場ができればいいと思います。百姓一人一人から「みどり戦略」を肉づけしていく、ものにしていく、実現していくようなアプローチの仕方、道筋はどこにあるだろうかというのを今から話したいと思います。

まず2050年の社会、私の見取図を簡単に話しておきます。農業は「産業」ではなくなっているのではないかと。なくなっていなければいけないのではないかと思います。かつて戦前の明治、大正、昭和期の農林官僚が考えたようなことにちょっと近いです。農業はほかの産業とは別なのだと、根本的に違うのだという考え方がもう一度花開く時代になるのではないかと考えています。なぜならば、もう資本主義は終わるのではないかと結構言われています。その割になかなか終わらないからがっかり来ていますけれども、もし資本主義が終わるとすれば脱産業化の社会になるしかないのではないかと。脱産業化は農業が手本になるしかないのではないかと私は思っています。

余り言い続けると「外からのまなざし」ばかりになるので、それを内側から見たらどうなるかという話に持っていきたいのですけれども、つまり産業というのはどうしても生産という概念に捉われて、商品化という資本主義のシステムの中に組み込まれて、そして生きものが一番嫌がる競争という論理を押しつけてきます。競争することが一番人間性を駄目にしていく。悩みを増やしていく元凶ではないかなと思うのです。競争を求められると人間はすごく卑屈というか、つらいというか、傲慢になっていきますよね。競争のない社会というのは20年後に想像するのです。「それは宇根さん、あんたの夢想じゃないか」と

よく冷やかされますけれども、夢想でもいいです。そういう社会を描いていくことが大事なのではないかなと思います。

それを「内からのまなざし」で見るとどうなるかということですが、案外ヒントは昔にあります。戦前ぐらいまであります。それに気づいたのは落ち穂拾いです。山梨県立美術館にミレーの「落ち穂拾い」の大きな絵が飾ってあって、なかなかいい絵です。見ていない方はぜひ見に行ってください。

ミレーはフランスの田舎に引っ越したとき、落ち穂拾いに感動するのです。ミレーの絵で落ち穂拾いをやっている女性たちは百姓ではありません。百姓だとかつての私は思っていました。あれは百姓ではない。貧しい女性たちが拾っているのだそうです。そのことを知ったときに本当に感動しました。それは西洋らしい習慣だと思い込んだのです。聖書にも落ち穂拾いは出てきますからね。神は貧しい人たちにも落ち穂を分け与えているのだ、みたいなことかなと思ったら違っていたのです。ミレーは絵を描くために田舎に引っ越したとき、落ち穂拾いをやっている女性が百姓でないことに対してまず驚いたのだそうです。山梨県立美術館にちゃんと説明がありましたから、私もそこで知ったのです。百姓でない女性が落ち穂拾いをして生計の糧にしている。だからミレーはあの絵を描いたのです。

ところが十何年か前ですけど、野本寛一さんという民俗学者を案内して百姓のお年寄りのところをずっと回っていたのです。最後に92歳の夫婦の百姓のところに寄っていろいろ話をされていて、野本さんが、「宇根さん、あんたも聞きたいことがあるだろうから聞いてごらん」と言うから、恐る恐る「落ち穂拾いはどうしていたのですか」と聞いたのです。すると夫婦は即座に、「落ち穂拾いは、うちの村では百姓はしてはならないというしきたりだった」と言うわけです。びっくりしました。「では誰が拾っていたのですか」と聞くと、稲刈りをして掛け干しが終わる頃になると、袋を持った人たちが畦にずらっと並んでいた。そして私たちが田んぼから引き揚げると、さーっと入ってきて一生懸命拾っていたと。うわっ、日本でもそうだったのか。てっきりキリスト教の教えかと思っていたら違うのです。つまり宗教を超えた何かが農の中にはあるということでしょう。

それから落ち穂拾いのことを勉強していると、江戸時代の農書にもいっぱい

出てきます。農文協から出ている『日本農書全集』の目録もありますから、あれを引いたらいっぱい出てきます。

さらにこの前、岩元さんと話していたら、岩元さんの友人の斎藤さんという人が一橋大学の大学院で最近博士をとったのですけれども、年齢は我々と同じぐらいです。彼が落ち穂拾いのすごい資料を発掘したのです。隠岐島に流された人が書いた文書を発見するのです。落ち穂拾いは貧しい女性のために残しておかないといけない。そうすることによって貧しい人もちゃんと生きられるような社会になるのだという資料を、流人である百姓が書いているのを発見するのです。これもまたすごいですね。日本の社会には、そういう社会慣行が共有されている時代も戦前まであったのだと。落ち穂拾いは戦後なくなりました。私たちも若い頃はもったいない穂を拾っているぐらいにしか思っていないんですけど、これはいったい何なのだ、と思います。

農というのは、自分だけが「めぐみ」を独占してはいけないことを教えています。こういう感覚にしてしまうものは何なのかと考えるわけです。つまり生産ではないということです。生産は、どうしても人間が自分のために生産して市場価値を生み出すものということなのですけれども、もともと農は「めぐみ」だった。天地からの「めぐみ」だ。それは自分だけが独占してはいけない。あまねくもたらされるものだ。

したがって天地自然は、これは人間に役立つ「めぐみ」、これは人間に役立つでない「めぐみ」と仕分けしてもたらしめているわけではない。後で話しますが百姓は天地自然に手を入れているわけだから、自分たちのところに天地自然は役に立つ「めぐみ」をいっぱいもたらしてくれるに違いないと思いたいけれども、現実にはそんなことないです。災害だってもたらずわけですからね。天地自然は人間の役に立とうと、立つまいと「めぐみ」をもたらず。もちろん災害も含んで「めぐみ」と私は言いますが、災害の場合は引き受けるしかない。だけれども、災害よりも「めぐみ」のほうが圧倒的に多い。台風が来る、大雨が降る。でも晴れている日のほうが圧倒的に多いわけです。

江戸時代、ウンカの被害で飢饉にさらされたことが何回かありましたが、災害の本を何冊か読みました。ウンカの被害は冷害に比べたら少ないです。ウンカによって飢饉にまで追い込まれた例は大体60年に1回です。ということは、

一生のうち1回あるか、ないかです。しかも地域は限られています。それを害虫だと決めつけることはなかったでしょう。これは災難、災害ですね。

江戸時代に害虫という言葉がなかった。これにもびっくりしました。「害虫」は明治時代になって学者が翻訳語として農村に普及させた言葉ですけれども、なかなか普及しませんでした。害になる虫もいます。60年に1回、飢饉をもたらすかもしれないけれども、五十数年間は害虫ではないのです。このような世界をどう捉えたらいいでしょうか。

そのときに私は、害虫という名前自体が間違っていたなと思いました。そういう意味で「ただの虫」の命名は救いだったと思います。田んぼの場合、177種類が害虫でカウントされていますが、そのうち本当に被害をもたらすのは十数種類でしょう。1割もないぐらいです。しかも毎年、被害をもたらすわけではないです。それなのに全て害虫と呼ぶわけです。稲を食べているのは全て害虫。科学的にはそれでいいと思います。稲を食っているのを害虫。害虫を食っているのを益虫、天敵。そしてそれ以外のものを「ただの虫」というのは間違いではないけれども、害虫もほとんどは害にはならない生きものです。だから本来害虫も天敵も「ただの虫」も、そういう分類は失礼なのではないでしょうか。この頃私は反省しています。江戸時代はただ「虫」としか呼んでいない。農文協の『日本農書全集』の中の「虫」という言葉は、全部「害虫」と翻訳しています。現代人はそう翻訳したほうが分かりやすいというのはあるかもしれませんが、あの翻訳は間違っていると思います。やっぱり「虫」ですよ。いろいろな虫と一緒に有用、無用を超えたところで存在しているのです。

ということは、「めぐみ」も有用、無用いろいろなものがあり、あるときは無用、あるときは有用、あるときはそういう区別すらも考えないものとして受け取ってきたのではないのでしょうか。それを落ち穂拾いは教えてくれたと思います。しかし「外からのまなざし」はゆがんでしまうのです。「内からのまなざし」のほうがよほど個人的で、情念的で、自分の思いに左右されてゆがむのではないかとかつては思っていたのですが、この頃は「外からのまなざし」のほうがゆがみやすいな、一面的だなと思うのです。

その典型は『サピエンス全史』です。あの本は面白かったのですが、ほとんど農耕批判のオンパレードです。語り方は面白いのですが。

例えばどういう語りかという、今日の資料（別添資料1）の1ページ、3の(1)に書いています。『サピエンス全史』で著者のユヴァル・ノア・ハラリは、「動植物は狩猟採集民と対等の地位にあったと。つまり狩猟採集時代は動植物は人間と対等だった。ところが農耕が始まって、農耕民は動植物を所有し操作しており、資産に格下げした」と書いているわけです。若干要約していますが、うそだろうと思いました。農業は動植物を資産に格下げした。これは極めて西洋的な「外からのまなざし」です。『サピエンス全史』の語りは、ああいう語りで本を書けば、絶対ベストセラーになるだろうなと思わせる本なのですが、中身は極めてたちの悪い物語だと思います。農業に対してすごく一面的で偏っていると思います。

では日本的な農業観というのはどこにあるのかという、探せばいっぱい出てくるのですけれども、探し方が分からない人には全く見えません。探し方の一例を示すと、隣のばあちゃんがこう言うわけです。「宇根さん、今年も草がよう伸びる季節になったね」と、「うん、大変やね」と言うと、「何が大変なものか、これも楽しみ」と。つまり、ばあちゃんはこう言うわけです。今年もまた草取りするのが楽しみな季節になったね。草取りは楽しいと言っているわけです。そういう気持ちを含ませて、「今年もまた草がよう伸びる季節になったね」と表現するわけです。これが百姓の表現です。その奥にさっきのオタマジャクシではないけれども、もっともっと深掘りしていくと無意識の層では、余り口には出さないけれども年を取ってくると時々言うのです。「宇根さん、草取りが一番楽しい」と。

山下惣一さんは私の先生ですが、亡くなる前に最後の話で、「山下さん、草取りが百姓仕事の中では一番楽しいと思いませんか」と言ったら、何と言ったと思いますか。「俺も最近そう思う」と言いました。もちろん年を取ってくると、じいちゃん、ばあちゃんに生産性を求めないということはあります。若いとなかなかそういうわけにいかないから、つい生産性を求めます。じいちゃん、ばあちゃんは生産性を求められないから、ゆったりした気持ちで草取りができますよね。でもそれだけではないです。

私もそうですが、じいちゃん、ばあちゃんは何で草取りが楽しいと思いますか。農本主義者の答えはこうです。とっくに農本主義者は言っているのです。草取り

のことでは言っていませんけれども百姓仕事一般に対して、百姓仕事が工業労働と違って一番幸せな状態になるのは、人間を幸せにするのはどうしてだと思いか。農本主義者はずばりこう言っています。「百姓仕事ほど我を忘れて没頭できるものはない」と。ほかの仕事だって我を忘れて没頭することはあるのです。百姓仕事だけではないです。でも百姓仕事は没頭しやすい。なぜか。相手が機械などではないからです。機械で没頭するわけにいかないでしょうね。

トヨタの自動車工場へ見学に行きました。すると、トヨタの案内の人がこう言うわけです。トヨタは必ず手仕事を残しています。だから全部ロボットに任せているわけではありません。それは1つのトヨタの矜持でしょうね。工場生産であっても、工場労働であっても手仕事の部分はちゃんと残す。おお、トヨタは偉いなと思いましたが、ほとんどはロボットがやっていますからね。でも手仕事の部分が大事だという感覚はトヨタですらも失っていない。

百姓仕事であればなおさら、トラクターの運転で我を忘れてしまっていると危ないですよ。つい居眠りをして畦を越えて転落する。農作業事故ではトラクターの転落事故が一番多いですから、機械を使っている仕事では我を忘れたらいけない。無意識の世界に近づいたらいけない。しかし、手仕事の場合はすごく我を忘れやすい。没頭できる。

農本主義者は、百姓仕事は忘我の境地に入ることが簡単だから人間を幸せにすると言っているわけです。しかも忘我の境地は、誰でもそうですが全てを忘れます。悩みも、時間の経つのも、家族のことも、生産性のことも、所得のことも全てを忘れて没頭できる。そして我に返るときの返り方がいいと思いませんか。これが百姓仕事の1つの特徴です。つまり無意識に近い状態から意識的な状態、我に返るのは風が教えてくれる。涼しい風がさーっと吹くと、はっと我に返る。あるいは体が疲れると我に返る。つまり頭で知らせているのではない。頭脳で、意識で知らせているわけではない。時計を見て、ああ、そろそろ昼飯だとか、そろそろあそこに行かないといけない、と時計を見ること自体、とっくに覚めていますからね。意識が戻ってくる前の状態では、体が働いている。我を忘れて仕事をしているのだけれども、体は動いているのです。これがいいところでしょう。百姓仕事から手仕事を失ったらいけない。

別にトヨタに対抗するつもりはないけれども、百姓仕事が全て機械作業にな

るとどうなるでしょうか。「みどり戦略」の一番駄目なところはここです。スマート農業で機械にやらせたら楽になる。生産性が上がると言っているわけでしょう。手仕事をなくせと言っているわけですが、違うでしょう。25年後の社会は手仕事をもう一回、きちんと評価するような社会にならないといけないのではないのでしょうか。手仕事というのは意識をできるだけ使わなくて、慣れた仕事であれば体でできる。そういう仕事を残すことが人間の幸せを失わない大きな手だてではないのでしょうか。ここまでは農本主義者は言っていないが、我を忘れることが百姓の幸せなのだとは言い切っています。戦前のことです。

それを受けて私はどのように展開していくかという話になりますが、ばあちゃんの話にもう一回戻ると、ばあちゃんは我を忘れて草取りに没頭しているのだけれども、草と話をしているわけです。体は動いているわけです。口は動いていないかもしれない。言葉にはなっていないかもしれませんが、半ば無意識で草と会話をしているわけです。この会話こそが百姓仕事のもう一つの真髄ではないかと思います。それこそ半ば無意識に話しています。「あんたはしつこい草やね。取っても取っても生えてくるね。ばってん、秋になるとほんとかわいか花を咲かせるね」と、そんな会話をしながら草取りに没頭しているわけです。

「みどり戦略」にそういう世界が表現してあるのでしょうか。ないですね。「みどり戦略」はもっと魅力的な戦略にしていけないといけないのです。百姓以外の方が百姓に憧れるような、農業に憧れるような、百姓をしてみたいと思わせるような戦略にならないと25年後の夢は描けないです。25年後はもっと生産性を上げます。もっともうけます。そんなのはもうどうでもいい。脱資本主義、脱近代化。新しい社会をつくるということはそういう夢を失わない。もう一度描いていく、言葉にする、訴えていく、表現していくことではないのでしょうか。残念ながら、我々が失おうとしている世界にそういう宝物がいっぱい眠っていると思います。

あと30分ありますね。よかった。今から今日の核心です。こういう世界をもっと百姓みんなが気づいて共有して、そして百姓以外の人たちにも伝えていくような、そういう運動というか、試みというか、営みというのができないものでしょうか。例えば多面的機能というのはいい言葉だと思います。しかし、「外

からのまなざし」です。多面的機能に匹敵する「内からのまなざし」がないと、両者がくっつかないと多面的機能は百姓のものにはならないと思いませんか。田んぼには生物多様性を保全する多面的機能があります。全くそのとおりです。でもこんな語り方は何か空々しいというか、冷たいというか、実感が伴わないという感じです。

分かりやすい例で言えば、田んぼには洪水防止機能があります。これも多面的機能の代表的な例です。学会会議の試算によると10 a 当たり 5 万円だったかな。学会会議の試算の式を使って糸島市で計算したらそうなりましたから地域によって違うと思いますけれども、田んぼには 5 万円の価値の多面的機能、洪水防止機能がありますと百姓はなぜ言わないのでしょうか。言えない理由がある。仮に言ったとします。すぐ反論が飛んできます。「結果的にはそうなっているかもしれないけれども、あんたたち百姓は大雨のときに何をしているのか。できるだけ田んぼに水をためないように、水の出口の板を外してどんどん外に捨てようとするだろう。田んぼに入ってくる水はぴたっと止めて、これ以上入らないようにするだろう。田んぼにできるだけ水をためないようにしているくせに、田んぼには洪水防止機能がありますと言えるか」と言われたら、もうぐうの音も出ないです。そこでぐうの音も出ないようになってしまうから駄目なのです。多面的機能では、これに反論できないでしょう。

田んぼには生きものを育てる多面的機能がありますと仮に百姓が言ったとすると、「うそつけ、おまえたちはただ田んぼに水をためているだけだろうが、おまえはたまたま無農薬で有機農業をやっているだけだろうが、生きものを育てようと思って水をためているのか、生きものを育てようと思って有機農業をやっているのか」と言われたら、ちょっとつらくなりますよね。

では、どう反論していったらいいのでしょうか。「内からのまなざし」で反論しないとイケない。多面的機能では反論できない。では、「内からのまなざし」ではどう反論できるか。多面的機能を支えている仕事を探すことです。多面的機能を支えている自分の情愛を、気持ちを、伝統を探すことです。ちゃんと見つけられます。その探し方こそが、もっと方法として表現できなければならないと思っています。

確かに、大雨のときに田んぼにはできるだけ水をためないようにする。だか

ら洪水を防ごうなんて気持ちはさらさらしない。でも田んぼには、やはり水がたまってしまっただろう。大雨のときは畦を越して、オーバーフローして水が流れていくのだ。結果的に水がたまるだろう。たまたま結果的にたまると言ってもらっては困る。何でたまるか分かるか。畦があるからだろう。畦は何で守られているか。草刈りをやるからだろう。しょっちゅう歩いて畦を固めているからだ。畦にモグラの穴が空けば必ずふさいで補修するからだろう。畦というのは百姓にとってすごく大事な場所なのだ、通路なのだ、仕事場の場なのだ。

私は畦草刈りを年6回やります。福岡県の平均は4回です。草刈りした畦を毎日歩くから、畦の内側には湿った草、外側には乾いた草、真ん中には踏まれても強い草が整列して畦は崩れないようになっているのだ。確かに畦草刈り、畦歩きをすることは、それを狙ってしているわけではないけれども、百姓仕事というのは人間が意図しない「めぐみ」を天地自然から引き出してしてしまうのだ。天地自然はそういうめぐみを百姓に与えてくれるのだ。これが百姓仕事のすごいところなのだ。もちろん意識的にオタマジヤクシを育てようとは思わないけれども、水が切れそうになると、あっ、このままではオタマジヤクシも死ぬな、早く水をためてやろうと半ば無意識に百姓は思うのだ。生きものが死んでいるとかわいそうだ、ごめんという意識になるのだ。そういう生きものへの情愛が百姓仕事の中に埋め込まれているのだ。この埋め込まれた情愛、自然観、生きもの観というものは守らないといけないのではないか。滅ぼしたらいけないのではないか。そう感じているのが百姓なのです。それを評価するための手だてを国民は、農水省は講じるべきではないか、と私は思います。

もし「みどり戦略」にこういう対策まで書き込まれたならば、この戦略はすごく画期的で、すばらしく、華やかで、本当に実りのある戦略になるでしょうね。今はそうでなくても期待をしています。25年間あるわけですから徐々に書き加えていって、そして気がついたら農水省の政策全体が変わっていた。産業政策ではなくなった。農水省こそ脱産業化の先鞭をつけてくれたというようになってほしいと、私は願っているわけです。百姓の情愛、内からのまなざしというものは、下手すると今発掘しておかないともう消えてなくなる可能性だってあります。そういう危機感を私は持っているわけです。

私の先生の渡辺京二さんは熊本でもう2年前に亡くなってしまったのです

が、傑作は『逝きし世の面影』という本です。江戸末期になって外国人が日本のいろいろなところを歩き回って感動したことを書き残すのです。渡辺さんは塾で教えたぐらいですから英語に堪能な人で、翻訳していないものは自分で翻訳して、そして集大成していくわけです。どういうことかというと、日本人にとって当たり前のことは日本人はほとんど書き残しませんが、外国人はそれをきちんと書き残すのです。「外からのまなざし」でびっくりして驚くからです。ということは、日本人が記録に残していないものを外国人は残している。それを整理して書いてまとめたのが、『逝きし世の面影』というすばらしい本です。環境のこと、農業のこと、社会のこと、いろいろなことが出てきますけれども、渡辺さんは最後にこのように書いています。こういう世界はもうほとんど滅びてしまったと。江戸時代のいろいろな習俗、習慣。伝統、社会史システムは確かに滅びたように見えます。

例えば外国人が一番驚くのは、日本の子供は本当に丸々太っている。これに驚くのです。田舎に行ってもね。日本の女性は本当に大事にされていると驚くのです。日本の道は本当にごみ1つ落ちていないと驚くのです。当時では当たり前だから、日本人はそんなことを何も書き残していないわけです。時々話していたのですが、「全部失われたわけではないですよ、眠っているだけですよ」と言うと、渡辺さんは、「そうかな」とすごく疑問に思われていました。でも「渡辺さん、農の世界ではまだ眠っているのです。町とか都会では失われていったかもしれないですが、農の世界ではまだ残っているのですよ」と言うと、「うーん、そうかな、もしそうだったら宇根さん、あんたが発掘しろ」と言っていました。だから渡辺さんが書かなかった世界を書くとしたら、『逝きし世の面影』ではなくて「逝きし世の復活」みたいな、よみがえりみたいなものが書けるのではないかと私自身は思っているわけです。

ただ、方法としては試行錯誤です。農の哲学というものが今からつくれるとすれば、今日話したようなことをもっと方法化して表現しないといけないと思いますが、私自身の力に余るという気がします。もっと若い人たちが、こういう着眼でやってくれるようにならないといけないのではないかなと期待しています。そのためにも私にできることはもっといい本を書くことです。それしか私の影響力はない。

『農はいのちをつなぐ』などの私の本のいいところは1つだけです。これも自慢話に聞こえたら申し訳ないけれども、私の本は国語の入試問題に使われる。ほぼ毎年ベストファイブに入ります。そういうものを調べている人がいるのです。

そこで皆さんに質問です。どこの入試問題に一番使われると思いますか。中学校、高校、大学、どこだと思いますか。大学入試に使われるとちょっとレベルが高い感じになるのですけれども、圧倒的に中学の入試問題です。ということは、小学校6年生が受けるわけです。小学生レベルの本ということでもある。よく言えば、小学生にも分かる本だということにもなります。若い人に分かるように書くのは本当に難しいです。

実は今日も来ている阿部さんや田口さんの力を借りて、今農文協で若い人向けに農の哲学の本を上下2冊書いている真っ最中です。これがもう難しい。大人向けであれば簡単に書けるのです。農文協の注文は高校生向けに書いてくれと、これが一番難しい。小学生向けは書けそうな気がします。少年の頃に戻ればいい。高校の頃に戻るということは思春期の真っただ中です。一番人生に迷っていて、社会に対していろいろ思いを抱いて苦しんでいる世代。こういう世代に分かるような本をどうやれば書けるだろうか。本当に今苦労しています。いや、どうにか書きたいと思っているのです。

農文協も難しく書き過ぎては駄目ですよと言われるから頭が痛い。どうですか、今日の話は難しかったですか。分かりやすかったのならば自信を深めますけれども、難しかったと言われると、やはり無理かなという感じになります。

そろそろまとめに入らないといけません、**「めぐみ返し」**という新しい言葉に行き着かないといけません。百姓は一方的に天地自然からの**「めぐみ」**を受け取っているわけではない。やはりお返しはしています。人間は誰でも物もらえばお返しをするわけです。田舎だったら必ずお返しをします。なぜお返しをするのですか。

物もらったときに私が一番不思議だったのは、田舎では**「すみません」**と言うのです。何で謝るのかと若いときは思っていました。何で**「すみません」**と言うのか、皆さん知っていますか。国語学者の本を読んでいると答えを書いていました。**「このままじゃすみません」**という意味なのだそうです。だから**「すみません」**は見事にお礼の言葉なのです。**「このままじゃすみませんよ」**。つま

りお返しをじき何らかの形でしますよ。それが日本人の伝統になっている。西洋では、これを「贈与論」として結構本気で展開していますよね。この「すみません」を、日本人的な贈与論で展開したらどうなのかなと思ったのがきっかけです。

「めぐみ」を百姓は一方的に受け取っているだけではなくて、返さないといけないのです。それは手入れということです。心の限りを尽くして田畑を手入れする。つまり田畑は天地自然の一部ですから、天地自然に対して手入れという形でお返しをするということです。

したがって、そういう意味でも農薬を使うのはまずいのです。農薬に対して当初百姓が違和感を抱いたのは、現代人は農薬で害虫を殺して病気を防いで楽だと思ってしまうかもしれませんが、農薬も当初はなかなか普及しなかった。百姓には違和感があったということです。手入れとしてこういう資材を使うのはお返しにはならないのではないかと、天地自然に対して失礼なのではないかと、何か合わないのではないかと。こういう感覚は案外深いものです。

話はそれるようですが、それこそ農文協の本を書くために今私は弥生時代の歴史の勉強をやっているのですが、縄文時代から弥生時代にどのように転換したかというのが一番不透明な、不確かな、余り誰も書いていないところなので書こうと思って、本とか文献をいろいろ読んでいます。感動したのは2つありまして、1つは国立歴史民俗博物館の大発見が十何年か前にありました。炭素14の年代測定の進歩によって弥生時代が500年遡ったのです。それまでの水田稲作の歴史が、がらっと変わった。

特に変わったのは私が住んでいる玄界灘北端、あの辺に稲作が2900年前に伝わってきたのですが、そこで250年間とどまっていたというのがはっきり分かったのです。250年間広がらなかったということです。そして関東まで来るのに650年間かかっています。近畿でも400年ぐらいかかっている。我々から見ると信じられないです。米は日本人の主食だと言っているわけですから、水田稲作はかつてはみるみるうちに日本全国に広がったというのが定説だったのが、今の新しい説では、水田稲作はなかなか広がらなかったと変わって来ているのです。

どうしてだと思いますか。そのヒントは私の地元にあります。今引っ越して福岡市の有田近くに住んでいるのですが、有田遺跡というのがあるのです。そこは

弥生時代の水田の跡は見つかっていないのだけれども、土器とか農具とか見つ  
かっているのが水田をやっていたのは間違いのない集落なのです。この前、私はて  
くてく歩きました。5 kmぐらい離れたところに四箇遺跡というのがあるのです。  
ここは弥生時代になっても200年間、全く水田稲作をやらなかった集落の跡なの  
です。四箇遺跡のほうが少し上流です。有田遺跡は下流です。上流の四箇遺跡の  
縄文人は200年間、5 km離れた下流の弥生人の稲作を時々は見に行ったり交流は  
あったと思いますけれども、水田稲作を取り入れなかったのです。

なぜだと思いますか。考古学者の見解はこうです。上流の四箇遺跡は水田を  
つくらなくても食べものには十分恵まれていた。狩猟採集というけれども、最  
近の説では縄文時代だって結構農耕はやっています。ちょこちょこ種をまいた  
りはしているわけです。

これもびっくりしたのですが、大豆は日本原産だそうです。ツルマメという  
のはどこでも生えていますけれども、ツルマメを栽培したのが大豆だと。1万  
1000年ぐらい前にツルマメを栽培し始めた痕跡があって、3000年ぐらいたつと  
ツルマメの粒径が2倍になるのだそうです。さすが考古学者ですね。ちゃんと  
土器について圧痕をレプリカ法で確認して、それが見事に明らかになっていま  
す。ツルマメの粒径が縄文時代を通してどれだけ大きくなっていくのを見てい  
くと、栽培化していたということがわかったのです。だから縄文時代も農耕は  
ぼちぼち始まっていたのですが、弥生時代の水田稲作ほど本格的な農耕にはな  
らなかったのです。その必要がなかったというのが考古学者の見解です。

私はそれだけではないと思います。水田稲作を5 km上流の村から時々交流し  
たり見に行ったりして、縄文人はすごく違和感を抱いたと思います。天地に対  
するお返しの仕方が全然違う。もちろん当時は天地（てんち）ではなくて天地  
（あめつち）と言っていたと思います。つまり天地との関係が全然違うと。こ  
こに違和感を抱いたのではないのでしょうか。縄文時代は約1万6000年前に始  
まって、農耕を始めたのは約1万年前からです。7000年近く農耕と採集を並行  
してやりながら蓄積してきた天地と人間との関係が水田稲作では見当たらない。  
違うぞ。この違和感こそが200年間、水田稲作を取り入れなかった本当の  
原因ではなかったのでしょうか。これは宇根説ですけどね。だから近畿まで400  
年かかる。関東まで伝わるのに650年かかる。これは農耕の歴史にとってはす

ごく大事なことでないでしょうか。

にもかかわらず、やはり取り入れたのです。これも大事なことです。年月がたてば分かってくるのです。水田稲作というものは天地と人間との関係がなかなか面白い。結構いいというのがどこかで伝わっていくのではないのでしょうか。だから取り入る。取り入れると、そこからはとんとん拍子に弥生時代、稲作文化が広がっていく。その結果、いろいろな弊害も出てくるわけです。

だから日本人が米は主食だと言う。米騒動のことを思い起こせば主食だと言うのは、単に米をよく食べているということでしょうか。でも経済的に言えば、米の支出に占める割合はわずかなものです。それを超えて米が主食だと言うのは、天地(あめつち)との関係が反映されているからではないのでしょうか。だからほかの食べものとは違う。量もいっぱい食べているのかもしれませんが、安藤昌益はこう言っています。米粒の中には天地が詰まっている。これは安藤昌益だけではなくて、江戸時代の百姓はみんなそう思っています。ただ、安藤昌益が偉そうに書いただけ。だからこそ偉いと思います。

何年前、小学校5年生に、「いただきます」は何のために言っているのかと質問しました。朝御飯を食べるとき、昼御飯を食べるとき、夜御飯を食べるときに「いただきます」と何のために言っているのか。圧倒的に多いのは、お父さん、お母さんに言っていますと言うのです。2番目に栽培してくれたお百姓さんに、天地自然にというのも若干います。その学校では生きもの調査とかやらせていますから、お母さんとかお百姓さんの次に多かったのは食べものに言っていますという答えでした。これが意外と大人には少ないです。御飯に「いただきます」と。だから私は言ったのです。江戸時代に安藤昌益というすごい人がいて、あなたと同じようなことを言っている。米粒の中には天地が詰まっている。米粒の中には生きものが詰まっている。それを別な表現で言ったのが、これ(「生きものもごはんも田んぼのめぐみ」下敷き一別添資料2)です。御飯茶碗1杯食べるとオタマジャクシ35匹が生きることができる。

この下敷きを小学校5年生に配って、「君たちは御飯を何のために食べているのか」と質問するのです。みんな元気で生きていくためとか、栄養を取るためと言うわけですが、「そういう考え方は捨てなさい。今からは、御飯1杯はオタマジャクシ35匹を育てるために食べるのだと思って食べてごらん」と言う

のです。子供たちは、「宇根さん、無理無理」と言うのです。まあ、分らないでもないです。「御飯1杯は稲3株分だもの。稲3株分の周りでオタマジャクシが35匹生きているもの。もし君たちが御飯1杯食べなかったら稲3株分の田んぼは要らなくなるだろう。そうしたら、そこで育っていたオタマジャクシ35匹は生きる場所がなくなるから死ぬということだろう。君たちが御飯を食べないということは、オタマジャクシ35匹を殺していることになるのだぞ」と言うと、一斉にブーイングです。「絶対言い過ぎだと思う」と。

「でも逆に考えてごらん。君たちが御飯1杯食べるから稲3株は必要になる。私たち百姓は一生懸命手入れをする。そうしたら、その周りでオタマジャクシ35匹はすくすく育つことができる。君たちは御飯を通してオタマジャクシとつながっているのだ。君たちは稲を通して、田んぼを通してオタマジャクシと生きもの同士の深い関係にあるのだ」と言うわけです。この下敷きはとうとう20万枚売れています。本もこれぐらい売れたらいいですけどね。なぜ売れているか。ほとんど百姓がまとめ買いをして地元の子供たちに配るのです。

いつの間にか食べものは人間のための食材になろうとしています。商品化されてきています。そうではなくて食べものは生きものなのだ。だから食べものを通して自然、天地（あめつち）とつながることができるのだ。食べものを食べることによって天地自然とつながることができる。これが農の最大のめぐみではないでしょうか。単なる食べもののめぐみではなくて、さらにその奥の世界まで農は提供してきた。だから「めぐみ返し」は百姓だけではなくて国民が、全員がやるべきことだと思います。そういう意味で農というのは「産業」に成り下がってはいけないと私は思っています。

## Ⅱ 質 疑 応 答

### (1) 岩元明久氏の質問

**岩元** 日本農業研究所の講演会は、宇根さんにとってはとても異端的な場だったということだと思いますが、いつになく迫力のある話でとてもよかったですと思っています。

最初の紹介でも書いた（別添資料4）のですが、宇根さんは2000年にN P O

法人農と自然の研究所を始めますが、最初から10年間、だから2010年には解散するということで始めて、今日の話にもあるように生きもの調査等々の仕事をされたということです。その間のことは結構みんなよく知っていて、問題はその後です。2010年以降のことについて今日は話があったと思います。特に今日は国の「みどりの食料システム戦略」がテーマでもあるので、そのことを含めて質問させていただきたいと思います。

宇根さんのレジュメに、「なぜ「思想家」になろうとしたのか」とあります。今日の話の中では、そこは少し飛ばされたと感じましたが、2010年以降、宇根さんの話にあったように表題に「農本主義」とつく著書をたくさん書かれております。それに対して考えをずっと深められてきたということで、その話があったと理解しました。

ただ、宇根さんの話にあったように我々のような昭和世代の人間というのは、農本主義というと非常にいろいろ複雑な思いがあって、なかなか素直に聞けないところがあります。

一方、新しい農本主義というように宇根さんも言っていますが、若い方々は、意外と素直に新しい農業に対する考え方、本当に新鮮だなという受け止め方をしている、それが一方で広がっているというように私自身は理解しているところです。

今日日本農業研究所としてはとても異例のことなのですが、オンラインで全国の普及指導員に参加していただいています。普及指導員たちは、思想家ということ自ら言っている現在の宇根さんがどういうことを考えているのかを知りたいというのが1つあったと思います。それについては本当に迫力のある話を聞いて一定の認識といえいいでしょうか、それぞれの理解というものができたのではないかと思います。

ただ、その一方で現実問題というか、自分の仕事のことで言うと、これまで化学農薬や化学肥料をスケジュール的に栽培暦に従って指導することなどを仕事の中心としてやってきたわけです。それに対してみどり戦略が施策として推進される中で、今日のような話を深めていかなければいけないですが、それ以前の問題として今日、明日にでも減農薬、減化学肥料、さらには有機農業の指導をしろということになっているわけです。そういうことで現実問題としていろいろ戸惑い

とか、どうしたらいいのだみたいなことがたくさんあると思うので、それに対して宇根さんがどんなことをアドバイスしてくれるかなというのがあるのだと思います。ということで、そういう点について何かアドバイスがあればお願いしたいということで、冒頭の質問にさせていただきたいと思います。

**宇根** みどり戦略で一番大事なことは、現場の指導員がどういう役割を果たすかということでしょうね。例えば生きもの調査は、今日も見えていますが全農の山崎さんとか、あるいは生協とか、自然保護団体とか結構いろいろやっていますけれども、もし生きもの調査を全国の普及指導員や農協の営農指導員などが、もちろんトレーニングはしないとイケないですけども身につけて村々で指導して回る、アドバイスして回ることになればすごく広がるでしょうね。みどり戦略は生きものを中心に組み立てることもできるでしょうね。それともう一つは、そのことで新しい言葉、新しい表現が生まれるでしょうね。

だから普及指導員、農協の営農指導員、あるいは役場の職員でもいいですけども言いたいのは、国から言われる前にやったらどうか。今こういうことをやって後ろ指を指されることはかなり少なくなりました。私の若いときは、赤トンボの調査をやるというと何か陰口をたたく人がいました。趣味の世界を持ち込んでいる。赤トンボは益虫ですからと、そんな理屈は通用しませんからね。でも赤トンボが益虫だからやっているのだという理屈を言ったことは一度もありません。赤トンボは田んぼで生まれているから調査をしているのだ。田んぼというのは赤トンボも生産しているのだという言い方でやってきたのです。今その点はすごくやりやすくなってきていると思います。やっている普及指導員はいるわけですから、そういう普及指導員がもっともっと出てきて、そこから突破口を開いていけたらいいなと思います。

そして、そういう普及指導員が増えてくれば国も動きやすいです。そういう普及指導員が全然いないところで、国だけがみどり戦略で生きもの調査をやれなんてことを言えば上意下達の、またいやらしい政策になりかねないのです。ですからキーワードは、現場の指導員がそういう世界に足を踏み込んでいく新しいツールはもうできているのですから、生きもの調査の方法もマニュアル化もされているわけですから、そういうものをどう活用していくかが1つの方法でしょうね。

もう一つは、もっと大事なことなのですが、みどり戦略が有機農業を広げるというのであれば、どの管内でも有機農業をやっている百姓は必ずいます。ただ、普及指導員や営農指導員は付き合いがないだけの話。もちろんある人もいます。そこに訪ねて行って話を聞くことでしょう。それは難しいことでも何でもありません。そこでどう学ぶか。その学び方が難しいでしょうね。学び方を先輩たちとか、専門技術員という人たちがもっともっと本気でアドバイスすべきでしょうね。

時代の主流ではない、亜流で異端だと言われた有機農業の百姓と若いときから付き合いってきて、すごく学んできた私としては付き合い合わないほうがもったいない。付き合いきっかけはみどり戦略でちゃんと示されたわけだから、どんどん付き合いえばいいと思います。組織化だってできるだろうし、ネットワークだってできるだろうし、そういうことを指導員に望みたいです。

それとみどり戦略の中に、そういう現場の指導員の役割をもう少しきちんと明記したほうがいいですね。国の政策と百姓をつなぐのは行政のルートももちろんありますが、技術指導、経営指導、生活指導の職員の役割というのがすごく大きいです。今までみたいに国が技術を開発して、普及指導員、営農指導員が普及するというのではなくて双方向のやり取りができるような、そういうシステムをつくっていかないといけないのではないのでしょうか。そういうことを試行錯誤でやってきた人間としては、やっとな気のできるかなということになっているのですけれども、みどり戦略を読んでも一行も書いていない。

新しいシステムをつくるのだ、みたいな、あるいは有機農業をやっている百姓の田んぼ、畑は研究圃場なのだというように位置づけてもいいのではないですか。試験研究だけやるのではない。試験研究はもちろん頑張ってやらないといけないけれども、百姓の田んぼ、畑も研究田、研究畑なのだというように位置づければ指導員もその研究を手伝う。あるいは一翼を担う。そういった役割も出てくるでしょうね。だからやるべきこと、やっていいことは山のようにあると思います。一番やりやすいところからやってほしいと願っています。

## (2) 後沢昭範氏の質問

後沢 後沢と申します。農林水産省OBです。

宇根さんとは、随分昔、平成元年頃でしたか、一度だけお会いしたことがあります。普及員をしておられた時です。当時、農水省に有機農業対策室が開設され、室長だったものですから、現場にお邪魔し、「ああ、こういう普及員の方がいらっしゃるのだ」ということでびっくりした記憶があります。農水省では、有機農業に目を向けましたが、実際に技術を持っているのは現場の方々です。それまで、お互い横を向いていましたから、まずは「現場に学びに行かなければ…」ということで、日本有機農業研究会の方々に御相談し、あちこちご紹介頂いたり、同行して頂いたり、また、それとは別に都道府県ルートで出張を組んで現場に行ったりしました。宇根さんとお会いしたのは、その様な時でした。確か、虫見板を1枚頂いた記憶があります。

「みどり戦略」のお話が出ましたが、当時と今とでは隔世の感があります。当時は、有機農業の実態を数量的に掴むのも難しい状況でした。有機農業と言っても、特定の団体の取組は別として、統一的な定義がはっきりしていませんでした。先ずは、有機農業を意識して取り組んでおられる方々の技術の内容と面積、考え方等を把握したいということで、都道府県の普及組織を通じて、掴める範囲で追い掛けました。農協組織でも、ある程度、把握しているところはありましたが、有機農家とはどちらかという反目しあっており、当初、そのルートでの調査はなかなか難しい状況でした。そうやって調べた有機農業、もしくは有機農業らしき取組も含めて集めた面積は、まだ非常に小さく、点の様な存在でした。

現在、かなり増えて来たものの、そう大きくなってはいないのが実態かと思えます。「みどり戦略」では、農地の1/4を有機農業に切り替えて行こうということで進められていますが、実際、現場での有機農業の捉え方は、あの頃と今とで、どう変わっているのか、進んでいるのか…。先程のお話の中でも、幾つか触れておられましたが、その辺り、どう見ておられるのか伺えればと思います。

**宇根** 私が感じている限りの話ですけれども、みどり戦略に生きもののことが余り出てこないのはどうしてかと考えていくと、有機農業の中に生きもののことが余り出てこないのはどうしてかというのと何かつながるような気がします。つまり有機農業も下手すると農薬、化学肥料を使わない、安全な食べものを生産

しているところにとどまっている百姓も結構いるわけです。逆に有機農業だからこそ生きもの調査とかきちんとやって、生きもの、環境に対してもまなざしを向けていこうというのも有機農業の百姓に圧倒的に多いと思います。農薬、化学肥料を使わない安全性というのはすごく語りやすい。分かりやすいのだけれども生きものとなると、有機農業をやっているから生きものが豊かだとは必ずしも言えない。つまり田んぼは一枚一枚違うわけで、場所によっても違うわけですから有機農業をやっているから生きものが多いとは一概に言えない。

でも仮に生きものがそんなに多くなくても、そこにまなざしを注いでいる。そのことが、まず価値がある。そこから少ないなりに生きものものを語れるというので次の価値がある。そして3番目に、少ないと自覚することがすごく価値がある。できるだけ増やせないものかと考えていくのがさらに価値がある。というように考えていけば生きものの種類とか数だけで評価するような、そういう一面的なことにはならないのではないかな。

ですから、生きものの評価の仕方、語り方というのが私も含めてまだ未熟です。農政も未熟、学者も未熟、百姓も未熟。その辺を豊かにしていく。生きもの調査のもう一つの目的でもあるのです。それが豊かになっていけば何か突破口はおのずと開けていくのではないかな。一言で言えば百姓の力で切り開くのではなくて、生きもの力を借りるという言い方のほうがいいのではないのでしょうか。生きもの力を百姓はまだ借り切っていない。もっともっと借りる力を、まなざしを身につけていく。これが有機農業の課題でもあるし、みどり戦略の課題だと思います。

### (3) 河原昌一郎氏の質問

河原 当研究所の河原です。

今日は本当に興味深い話をありがとうございました。随所に鋭い考察がなされていて感服いたしました。いろいろと教えられることが今日は非常に多かったと思っております。

1つだけ質問があるのですけれども、農業観ということについてなのですが、基本的には日本の農業観でおっしゃっておられるわけです。世界には、例えばヨーロッパの有畜の畑農業もありますし、アメリカはトラクターの大規模

農業もありますし、農業の形式が全然違うわけです。だから世界的な共通の農業観をつくるのはなかなか難しいのかなと思ったりするのですが、日本的な農業観とおっしゃっているのですけれども、日本的というのほどのような意味なのか。その辺のお考えがあれば、教えていただければありがたいと思うのです。

**宇根** なかなか難しい質問で、私も世界のことに詳しいわけでも何でもありませんけれども、そこに日本農業新聞の山田さんが来ています。山田さんがヨーロッパとかアメリカを取材されて農業新聞に記事をよく書かれていますけれども、それを読むと進んでいるなと思いますよね。一方で本当は日本のほうが豊かなのに、評価はアメリカ、ヨーロッパのほうに先を越されているなと思います。特に環境問題に対しては、それを価値として表現しようとヨーロッパ、アメリカの方が雄弁です。その点、日本はなかなか価値表現が遅れているというか、下手くそというか、それはどうしてかなと考え込むのです。

それが日本的な農業観とはどういうものかという質問とつながってくるのですけれども、「自然」という言葉が長い間、日本語にはなくて、やっと戦後、百姓のものになった。つまり「自然」を対象化するという習慣がまだ浅いのですよ。逆に言えば自然と一体化して、自然に埋まってしまう、溺れてしまう、自然の中に埋め込まれてしまう。そういったものをよしとしてきた文化なり感性が日本にはあった。だけど今の時代、それだけでは表現が出てこないから外からのまなざしも、自然を対象化していく、環境を対象化していくまなざしも必要です。その辺の訓練もまだ弱いと思います。

つまりもともとの日本的な自然と一体化する、生きもの同士として人間が偉くならない、人間中心主義にはなれない日本的な感覚と、人間から自然を見る、人間から環境を見る、人間から食べもの、生きものを見ていく西洋的な「外からのまなざし」が、やはりどちらも大事なんでしょうね。どちらも今の日本の百姓、日本の農業界は弱いのではないか。

「外からのまなざし」は結構学者とか研究者は強いですがけれども、この人たちは「内からのまなざし」と橋渡しをしようという方法論が弱い。百姓のほうは逆に外からのまなざしでも刺激を受けるのだけれども、それと自分たちの内からのまなざしがどのようにつながっているのかを考える習慣がまだできていない。その辺が今からの課題ではないかなと思います。

#### (4) 浅妻祐一郎氏の質問

(オンラインで参加して頂いた兵庫県但馬県民局朝来農業改良普及センターの浅妻氏からの質問を日本農業研究所菅原常務が読み上げ。)

**事務局（菅原）** それでは、事務局から読み上げさせていただきます。

御講演ありがとうございました。兵庫県朝来農業改良普及センターの浅妻と申します。

僭越ながら質問いたします。ふだん若い農業者と接する中で利益を追求する姿勢が強まっており、自身が管理する田に生きる生きものへのまなざしがないと感じることが多々あります。私自身は生物多様性を研究対象とした身の上、利益を追求する姿勢は生物多様性をはじめとする自然環境の劣化につながるものと懸念しております。こういった若い農業者へはどのように接していくべきかを御助言いただけないでしょうか。よろしく願いいたします。

**宇根** 確かに、お金を稼がないと生きられないような社会システムにどんどんなってきています。かつては少々金がなくても百姓をしていけば生きていける。いわゆる「なりわい」の延長でもあったのだけれども、現在は分業化が進んでそれすらも危うくなっています。農家の食料自給率が金銭換算で10%を切ったのはもう20年ぐらい前ですか。それぐらい百姓自身も自給というのをどんどん捨ててきて、分業化に走ってきたのはやむを得ないのだけれども、それでも金にならない世界が大事だということはいろいろなところで気づくのではないのでしょうか。

例えばみどり戦略の中にも書き漏らしているというか、わざと書いていないのかもしれませんが、EUでは百姓の所得の7、8割は税金から直接支払われています。理屈はいろいろあるのだけれども、私もドイツに3回ほどしか行ったことがないので、ある事例しか知りませんが、生きものが多様に生きている畑に対して環境支払いというのが支払われています。そのことによって百姓は、うちの畑には野の花がいっぱい咲いているから、まちの人たちがやってきたときに本当に褒めてくれるのだからって言ってました。つまり畑の野の花を褒められるような百姓というのがEUでは生まれてきているわけです。日本で、おたくの畦は春になったら百花繚乱のように花が咲き誇っていますね（うちの畦なんて200種類ぐらい生えていますから）と言って、褒めてくれる国民

はまだほとんどいません。環境の価値が本当に国民全体の財産として言葉になり、褒められるなんていう国に日本の場合はなっていないと思うのです。だけれども、方向としてはそっちに行くべきではないか。

日本でも環境支払いをやるべきだと。例えば畦草刈りを年4回以上やる場所では10a当たり1万円、環境支払いをします。さらに畦に指標種の20種類のうち10種類以上が見つければ2万円上乗せしますよと。そうすることによって百姓も畦草刈りの価値を自分で自覚できるようになるでしょう。そして畦の草花の調査もやるようになるでしょう。それを指導員がトレーニングする。そこから百姓自身はまた野の花へのまなざしを取り戻すでしょう。

かつて600種類も生きものの名前を呼んでいた百姓ですが、現在では多くても150種類しか知らないような百姓では、環境のこと、生きもののこと、自然のことは語れませんよね。そういう状態から脱出していくための手だてとして「環境支払い」があると思います。私は直接支払いでも「所得補償」は大嫌いなのです。安い米価を正当化するために利用されるような気がして、また「貧しい百姓を支える」というイメージが古くさくて所得補償では駄目です。本来「環境支払い」は天地に払うべきだけれども、天地の名代として百姓が代わりに受け取る。受け取った以上は百姓には責任が生じる。かつてその責任を「天命」と呼びました。責任を果たすための手入れ、技術が必要になってくる。そこに指導員というのはどう関わっていくのが大事になっていくでしょうね。

だから若い百姓に対しては、現代社会では金もうけはどうしても避けられないけれども、本来は市場で所得を得るのはおかしいのだと。今の社会は過渡的な段階なのだ。農業を取りあえず資本主義化して行って、ほかの産業に負けないようにしようとした日本の農政が過渡的にたどった道筋でしかないから、将来は、2050年はそれから脱却しよう、じきみどり戦略も謳うようになるから、それまであなたはじっと見据えて、そのための準備をしておかないといけないよと。その準備をしていく、あなたたち若い百姓がいなければ国全体も農政も変わらないよと。私たち指導員は、それを一生懸命支えるからと。このような付き合い、アドバイスしか今はできないのではないのでしょうか。でもそのこと自体も大事だと思います。

**菅原** 浅妻さんからのコメントです。御回答いただき、ありがとうございます

した。まだまだ若輩者ゆえ踏み込んだコミュニケーションが難しいと感じております。ですが、でき得る限り精進はしたいと存じます。ありがとうございました。

#### (5) 岸 康彦氏の質問

**岸** ありがとうございました。皆さんも御存じのように、今日はたまたま山下惣一さんの御命日でございます。宇根さんはさっき山下惣一さんは先生だとおっしゃいましたが、我々から見れば年齢を超えてまさに盟友であったと思いますけれども、宇根さんは「めぐみ返し」ということについて山下さんと議論されたことはありますか。端的に言いますと、山下さんにここは違うよと言われたことはありますか。ちょっといじわるな質問で恐縮ですけれども、ありましたらひとつ教えていただきたいと思います。

**宇根** ちょっとここは違うぞと言われたこともありました。思い当たることもいっぱいあります。だけど印象深いのは、金にならないものが未来に残る。金にならないものこそ未来に引き継がないといけないとあなたは言うけれども、自分はぴんとこない。でも改めて考えてみると、俺が今までずっと言ってきたのはそういうことだったような気がする。このように山下さんは答えてくれましたから、私はとてもうれしかったですね。

**岸** いかにもお二人らしいというお答えを、ありがとうございました。宇根さんと意見が食い違うことがあるのかとずっと思っていたものですから。

#### (6) 生源寺眞一氏の質問

**生源寺** 久々にお話を伺って、ありがとうございました。

今日は哲学、歴史の領域にもかなり踏み込んだお話でしたから、後ほど勉強させていただきたいと思います。

お話の中で、ああ、そうだなと思ったのは多面的機能の議論です。これについてはすでにいろいろな形で発信されているのですが、農業の副産物としてですよ。それは大事だけれども、農業そのものの本質についてもっと伝達する必要があるのではないかと思っていまして、その意味で今日のお話、誠にそうだなという感じがいたしました。

ここからはコメントで、今かなり盛り上がりがある農福連携についてです。農業と福祉の連携。障害者に限りませんが、農業そのものの意味合いが改めてクローズアップされる。そんな取組になっているのではないかなという感じもいたしました。そのことにも今日のお話はつながると受け止めました。どうもありがとうございました。

——了——

## 農を生産業から、めぐみ返しにする —みどり戦略を深く思想化すると—

宇根豊（百姓）

これまで「農は<sup>なりわい</sup>生産だ」と考えて来ました。しかし、もうそれでは通用しないのです。産業の「生産」は「商品」を産み「競争」をもたらします。カネに代えられないもの、あまねくもたらされるものとしての「めぐみ」をなんとしても、「農」の原理（本質）として思想化できないものかと、考え抜き「めぐみ返し」に行き着きました。今日はほとんど聞いたことのないような話を、つまりすぐには理解しにくい話を、できるだけわかりやすく話しますので、つきあってください。

### 1、自己紹介に代えて

●よくぞ私のような「異端」が、それなりの異端の仕事をつくることができたものだと、ことあるごとに振り返る。それは、どうしてだったのか、突き止めておかねばならない。

- (1) 「減農薬運動」とは何だったのか
- (2) 「虫見板」の普及と「ただの虫」の発見
- (3) 「農と自然の研究所」がやったこと
- (4) なぜ「思想家」になろうとしたのか

### 2、変わらないものを求めて

●「みどり戦略」は2050年を目標年としている。ことあるごとに25年後を想像するようになったことが、この戦略の一番いいところ。でも「未来構想」は描けていない。

- (1) 「落ち穂拾い」の習慣はどこに眠っているのか
- (2) 「未来構想」の核は、変わらないものを保つことではないか。
- (3) 近代化されても、近代化されないものとは「カネにならないもの」ではないか
- (4) 「農らしさ」「農の原理」への着目は、現代的なんだ

### 3、西洋的な見方への疑問

●「自然」という言葉が二度も輸入されたことを知ったことで、私の人生は変わった、と思う。自分の中の、外からのまなざしと内からのまなざしに気づいたからだ。

- (1) 『サピエンス全史・下』「動植物は、狩猟採集民と対等の地位にあった。それとは対照的に農耕民は動植物を所有し操作しており、資産に格下げした」じつに現代的な農業観の典型だろう。
- (2) では、日本的な「農業観」とはどういうものか。
- (3) 狩猟採集時代の「めぐみ」は、農耕によって「めぐみ返し」を伴うものになった。
- (4) なぜ「生産」も「技術」も「労働」も「除草」も「害虫」も、そして「持続可能」も「自然」も翻訳語なのか。

### 4、百姓言葉の中に「農の哲学」というものをさがす

●内からのまなざしは外からのまなざしと出会わないと、「理論」「思想」「哲学」

にならないのか。そこが問題だ、と思う。

(1)隣の婆ちゃんが言う。「今年もまた草とりができる」と。その土台には、「今年もまた草が生えてくる」「草にまた会える」「草と話ができる」「そういう季節がめぐってくる」「そういう天地自然の下で生きている」という感覚がある。

(2)「(百姓仕事の中でも)草とりが一番楽しい」と多くの(年配の)百姓が言うのはどうしてだろうか。まあ、年寄りには「生産性」を求めないから、ということもあるが、ほんとうの理由は、別にあるようだ。それを百姓は語らない、さがさないのはなぜか。

(3)戦前の農本主義思想の一番すごいところは、自分の仕事の内側を、外側から見る方法を発見した。曰く「百姓仕事の幸せは、自分を忘れることだ」そして我に帰らせるのは「涼しい風であり、疲れた身体である」と。さらに振り返って「自然と一体になっていたんだ」そこで、重ねて問う。「なぜ、忘我の境地は幸せなのか」と。

何のことはない。ここにあるのは「人間中心主義」(ヒューマニズム)を超えていく日本的な思索だった。これを引き継がずにおかれようか、と私は気づいた。

(4)「農の原理」というような難しいものを探さなければならなくなった時代とは、いったい何なんだろう。どうにかして「救わなければならない」いや「救われたい」と願ってしまう時代に生きる百姓の辛さと哀しさがある。

(5)「今年も草に会える」ことが幸せだった、嬉しかった、喜びだったのはなぜかと問い続ける「農の哲学」はできるだろうか。

## 5、「農らしさ」「農の原理」の核になっているもの

●農本主義者の百姓らしい思索のもう一つの素晴らしさは、脱「人間中心主義」に言葉を与えたことだ。それこそ、百姓仕事の中から見つけ出した言葉「相手本位」だ。この相手とは、人間以外のすべてだった。

(1)作物や家畜はもちろんのこと、草や蛙や鳥とも、百姓が話すだけでなく、会話し、心まで通わせるのは、百姓仕事がそういうものだからである。

(2)安藤昌益は、言い回しは難しいのですが、言っていることは、あたりまえのことです。「夫れ自然・天地の大道は、万物生生の直耕と、人之れを継ぐ五穀の直耕と、天人一和の直耕、是れ自然真の大道なり」つまり農の本質は「天地の直耕」であり、それはその天地の直耕を、五穀とさまざまな生きものと百姓と一緒にやるから、「天人一和」となる、と言っているのです。

(3)「生産」とは、人間が生産するものです。「めぐみ」とは、いただく、受けとるものです。西洋的に言うなら「贈与」ですから、必ず「お返し」せねばならないのです。つまり「めぐみ返し」です。

(4)最大の「めぐみ返し」とは、仕事の相手とまた会えるようにすることです。天地自然が変わらずくり返してくれるように手助け(手入れ)することです。

## 6、「みどり戦略」の核に、「相手」である「生きもの」を迎える

●外から見ると日本の赤とんぼの99%は田んぼで生まれています。内から見ると、田んぼに入ると赤とんぼが寄ってくるのはいいものです。この二つに架橋できるのか。

(1)「田植え」をするから、蛙やとんぼが産卵する。畦草を刈るから、日照り子と大葉子と振花が整列して育つ。

(2)したがって「田植え」と「畦草刈り」に「環境支払い」を行うとしよう。すぐに出てくる反論は「田植えも、畦草刈りも生産コストに入っている」。その生産コストは、イネのためであって、蛙や振花の生産コストではない。すると「蛙や振花は有用な生産物ではない」と言う。

(3) 天地自然からの「めぐみ」に「有用」「無用」のレッテルをだれがどういう基準で貼るのか。

(4) 私は「相手本位」を「生きもの同士」と言い換えて、共闘したいと思う。橘孝三郎は「農は資本主義に合わない。なぜなら百姓の相手の生きものは経済で生きているのではない」と喝破した。

(5) 私はこれを受けて、「(人間を含む) 生きものの生に効率を求めてはいけない」と主張したい。

(6) つまり、2050年の「社会構想」とは、生きものが生きものらしく生きられる世の中になることである。農に「生産性」を求めず、もっと豊かなものを期待する世の中にするのである。

## 7、食べものは生きものだ

● 昨今の「コメ騒動」では、みごとに食べものが生きものであることが忘れられている。安い高いか、よりもっと大切なことがあるのに、と思う。

(1) 「農業は食料を生産する産業である」という定義らしきものは新しい。きわめて西洋的でもある。しかし、EUの百姓は所得の7, 8割を税金から支援されているところを見ると、西洋では農業はもう「産業」ではなくなっているようだ。

(2) イネから、価格を見るとどうなるか、と日本人の私は考える。倉庫の中で、コメは思う。「私の価値は収穫後にこんなに変化するのはなぜだろう」と。それに「需給バランスで決まるんだ」「嫌生産コストを上回れば利潤がでるんだ」と答えたら、コメに対して失礼にならないか。

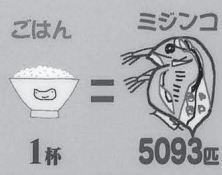
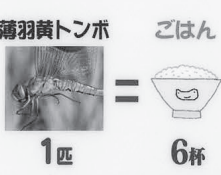
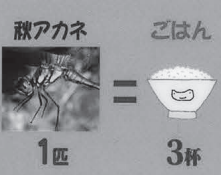
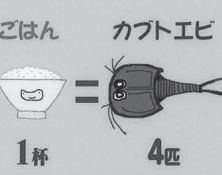
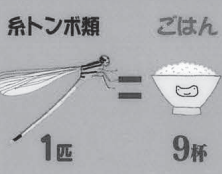
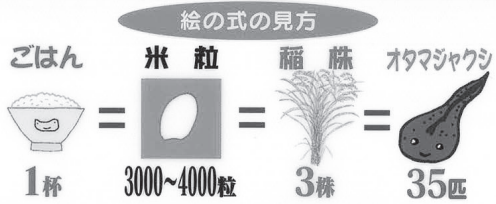
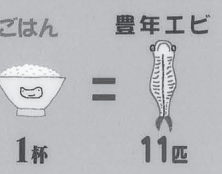
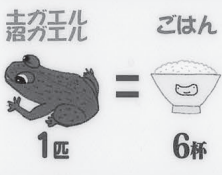
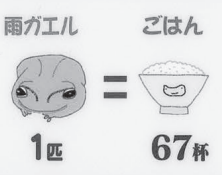
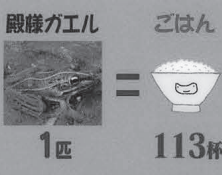
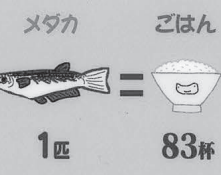
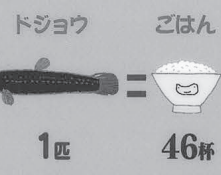
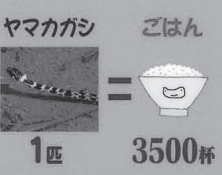
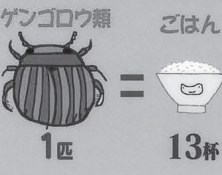
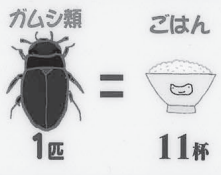
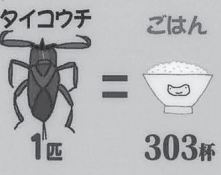
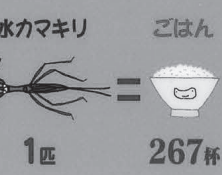
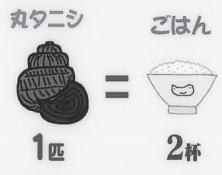
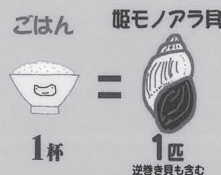
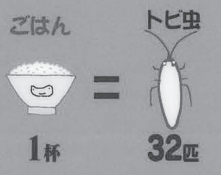
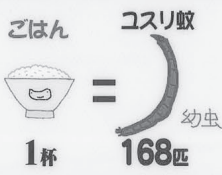
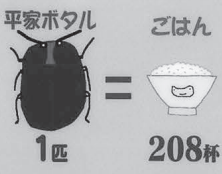
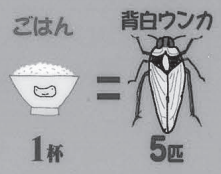
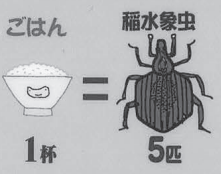
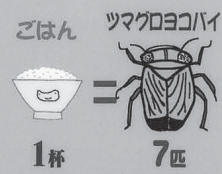
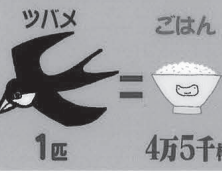
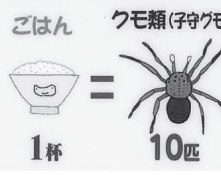
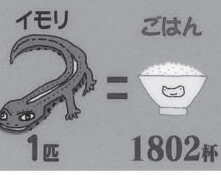
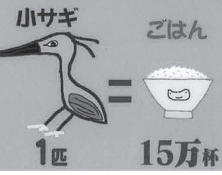
(3) イネ・コメはこう答えるでしょう。「私は天地自然のめぐみですから、天地自然からの贈りものですから、あなたのお返しでいいのです」と。つまり「めぐみ返し」は、「市場」ではないところで行われて来たのだから、新たな「場」や「しくみ」「政策」を構想しなくてはならない。「国有化」？「国民財産化」？「社会的共通資本」？「環境支払いの対象」？「所得補償」？「無償化」？「配給制」？

(4) 安藤昌益の『統道真伝』から、「米粒の中には、天地の日月と、人の魂が備わっている。米粒の中には、天のみのりと、地のみのりが具わっている。つまり、米粒の中で、天地が一体になっている」このような感覚を取り戻さない限り、脱資本主義化は無理だろう。

(5) 一人の小学性が言った。「ぼくは、“いただきます”と目の前の食べものに言っています。なぜなら、食べものは生きものだから」と。私は言う。「きみは、江戸時代の安藤昌益という人にそっくりだね」と。

### 【参考】主な著書

- (1) 『うねゆたかの田んぼの絵本』全5巻 2021年 農文協 各2700円
- (2) 『百姓学宣言』2011年 農文協 2600円
- (3) 『愛国心と愛郷心』2015年 農文協 2400円
- (4) 『農はいのちをつなぐ』2023年 岩波ジュニア新書 900円
- (5) 『農は過去と未来をつなぐ』2010年 岩波ジュニア新書 800円
- (6) 『農本主義のすすめ』2016年 ちくま新書 800円
- (7) 『日本人にとって自然とはなにか』2019年 ちくまプリマー新書 800円
- (9) 『虫見板』農と自然の研究所 300円
- (10) 『生きものもごはんも田んぼのめぐみ下敷き』農と自然の研究所 200円

<p>ごはん = ミジンコ</p>  <p>1杯 = 5093匹</p>	<p>薄羽黄トンボ = ごはん</p>  <p>1匹 = 6杯</p>	<p>秋アカネ = ごはん</p>  <p>1匹 = 3杯</p>	<p>ごはん = カブトエビ</p>  <p>1杯 = 4匹</p>
<p>糸トンボ類 = ごはん</p>  <p>1匹 = 9杯</p>	<p>絵の式の見方</p> <p>ごはん 米粒 稲株 オタマジャクシ</p>  <p>1杯 = 3000~4000粒 = 3株 = 35匹</p>		<p>ごはん = 豊年エビ</p>  <p>1杯 = 11匹</p>
<p>まぐわエル 落ぐエル = ごはん</p>  <p>1匹 = 6杯</p>	<p><b>生きものもごはんも田んぼのめぐみ</b></p> <p><small>データは、2001年の全国調査の平均値です</small></p> <p>稲3株分(0.15m<sup>2</sup>)の田んぼで、オタマジャクシは35匹育っています</p> <p><small>農と自然の研究所 TEL&amp;FAX:092-326-5595</small></p>		<p>雨グエル = ごはん</p>  <p>1匹 = 67杯</p>
<p>殿様グエル = ごはん</p>  <p>1匹 = 113杯</p>	<p>メダカ = ごはん</p>  <p>1匹 = 83杯</p>	<p>ドジョウ = ごはん</p>  <p>1匹 = 46杯</p>	<p>ヤマカガシ = ごはん</p>  <p>1匹 = 3500杯</p>
<p>ゲンゴロウ類 = ごはん</p>  <p>1匹 = 13杯</p>	<p>ガムシ類 = ごはん</p>  <p>1匹 = 11杯</p>	<p>タイコウチ = ごはん</p>  <p>1匹 = 303杯</p>	<p>水カマキリ = ごはん</p>  <p>1匹 = 267杯</p>
<p>丸タニシ = ごはん</p>  <p>1匹 = 2杯</p>	<p>ごはん = 蛞蝓ノアラ目</p>  <p>1杯 = 1匹</p> <p><small>逆さま見も含む</small></p>	<p>ごはん = トビ虫</p>  <p>1杯 = 32匹</p>	<p>ごはん = コスリ蚊</p>  <p>1杯 = 168匹</p> <p><small>幼虫</small></p>
<p>平家ホタル = ごはん</p>  <p>1匹 = 208杯</p>	<p>ごはん = 背白ウンカ</p>  <p>1杯 = 5匹</p>	<p>ごはん = 稲水象虫</p>  <p>1杯 = 5匹</p>	<p>ごはん = ツマクロヨコバイ</p>  <p>1杯 = 7匹</p>
<p>ツバメ = ごはん</p>  <p>1匹 = 4万5千杯</p>	<p>ごはん = クモ類(子守グモ)</p>  <p>1杯 = 10匹</p>	<p>イモリ = ごはん</p>  <p>1匹 = 1802杯</p>	<p>小サギ = ごはん</p>  <p>1匹 = 15万杯</p>



### 米は「工業製品」か

米の価格が1年で2倍に上がったのが異常なのではなく、需給バランスで価格が決まることが異常なのだ。コスト計算を決めるのもおかしい。しかも「高」」「安」という議論ばかりで、工業製品並みになった米の価格に赤トンボやカエルの価値は含まれていない。なぜなら赤トンボやカエルの姿は自然現象だから、たとえ日本人は思っているからだ。

## 「めぐみ返し」への支援を



百姓思想家 宇根豊

うね、ゆたか、1950年生まれ。農林政策普及員時代の78年から環境運動を始める。「米と自然の研究所」代表。主な著作「農本主義のすすめ」「ゆたかの田んぼの秘宝」「農は、土のちからをたぐう」など。今秋に「めぐみ返し」の哲学書を刊行予定。

したがって「農」が生み出す多くの「めぐみ」(環境)の価値は、市場から見放され、危機に直面している。そこで米の価格に上乗せできないのなら「環境支払い」で持つようにすればいい。もともと食べものの価値を需給バランスやコスト計算で決めるのは、方便

だった。これは「生産」という工業の考え方を「環境」に当てはめた結果だ。「直接支払い」の根拠

もそもそも食べものは、生きものだから、人間が「製造生産」しているのではない。天地自然から授けられている、いただいている。欧州では百姓の所得の70

という受け身の感覚が強かった。私は若い頃、食べものは「つくる」ではなく、とれぬ、できるものだ」と教え込まれたものだ。つまり「農」とは天地自然の「めぐみ」を百姓が手

入りの限りを尽くして受け取るものだ。欧州では百姓の所得の70

80%は、国民の税金から「直接支払い」で得られている。「農」は市場では評価できない価値をいっは供給しているからだ。それを国民が評価しているからだ。「農」が「産業」にな

ってはいけない理由がここにある。「所得補償」や「環境支払い」を要求する根拠がここにある。ただし「所得補償」は生産性が上らない弱小産業の救済策だと誤解されるだろう。あるいは「安い米」を正当化する手段に成り下が

るだろう。国民が支える「価値」一方の「環境支払い」は、天地自然の「めぐみ」の価値を、天地自然の名代として百姓が受け取る。受け取る以上、百姓には天地自然の「めぐみ」が変わらずに繰り返すようにする責任が生じる。これこそ百姓が「天命」だと感じてきたものだ。農水省が、環境への配慮を「農家に新たな負担が生じる」と言うのは浅薄な理解だ。この「天命」を百姓だけでなく、国民の全が感じてほしい。

日本人が「自然」と呼んでいる多くの「めぐみ」は、「農」があっても繰り返す。この「めぐみ」が繰り返すようにする責任を「めぐみ返し」と呼びたい。「環境支払い」はこの「めぐみ返し」のための国民からの支援なのだ。新しい時代の扉を開けよう。

令和7年度第2回講演会 「農を生産業から、めぐみ返しにする  
—みどり戦略を深く思想化すると—」のご案内

公益財団法人 日本農業研究所

宇根豊は、1950年に長崎県島原市の農家に生まれる。1973年九州大学農学部を卒業すると同時に福岡県に入庁し、農業改良普及員となる。1978年より青年農業者たちと協働して減農薬稲作運動を提唱する。虫見板を普及させ、害虫でも益虫でもない「ただの虫」という概念によって、農学と農業技術の世界を「天地自然」にまで広げていく道を拓く。1989年には糸島郡二丈町において自ら農業を始める。2000年福岡県を退職して、NPO法人農と自然の研究所を設立し代表理事に就任。「田んぼの生きもの全種リスト」の作成や「日本版環境デ・カップリング案」の発表等の活動を行うとともに、農業を「内からのまなざし」と「外からのまなざし」から見る視点を深めた。NPO法人は10年と限った使命を終えて、2010年4月には解散している。

このように農業の専門家として、特異な活動を行ってきた宇根に対して、組織と農業現場の狭間に立たされて悩む普及員からは「どうしたらそのような活動ができるのか」と、問われる。すると、宇根からは「私だって6割は組織人、残りの4割で信念に従ったまで」との答えが返ってくる。それほど実は、密かに宇根豊の活動に共感し、応援する農業技術者は多かったということであろう。

さて、国は2021年5月に「みどりの食料システム戦略」を決定公表し、本年4月に閣議決定された「改正基本法に基づく食料・農業・農村基本計画」でも「環境と調和のとれた食料システムの確立」が大きな目標として掲げられるようになった。ようやく宇根に追いついてきたとも見える。そのような農業と農政の現状を、宇根はどうとらえているのか、改めて率直に語っていただく。

1. 日 時:令和7年7月10日(木) 13:30~15:30(2時間程度)

2. テーマ:農を生産業から、めぐみ返しにする—みどり戦略を深く思想化すると—

3. 講 師:農と自然の研究所代表・農学博士 宇根 豊うね ゆたか氏

4. 参加方法:

(A) 来場(場所:日本農業研究所1階会議室 東京都千代田区紀尾井町 3-29)

(B) オンライン配信

5. 申込締切日:令和7年7月8日(火)まで

6. 申込フォーム <https://forms.gle/RZEZA3luYrIvyB747> よりお申込みください

## 解 題

岩 元 明 久

講演者の宇根豊さんは、ご自身が講演の中でも触れ、本講演会の案内でも紹介したように、1973年九州大学農学部を卒業したあと福岡県に入庁し、農業改良普及員となり、1978年頃より減農薬稲作運動を提唱し始められた。1970年代と言えば、1971年に環境庁が発足し、産業の発展とともに戦後社会を揺るがしてきた公害問題に一区切りがつく一方で、農業分野では、連載中から大反響を呼んだ有吉佐和子の新聞小説『複合汚染』が1975年には単行本として刊行され、「農業と環境」の問題が世間一般に問われるようになる発端の時代である。それは現在の「農業と環境」の情勢につながって行く一つのエポックであった。

講演でも宇根さんが「何でこんなに百姓は農薬をいっぱい振るのかなと、先輩の普及員は何で農薬をこんなに散布させるのかなと、疑問でした」と述べているように、その当時の農業全般の現状は化学農薬、化学肥料への無批判な依存の絶頂期であったが、宇根さんと同様に「大学時代はできるだけ農薬を使わない。そういった勉強をしたり、グループにも入っていた」農業技術者たちの、農学と農業技術の視野を「環境」にまで広げていく「虫見板」、「ただの虫」などの実践への密かな共感の広がりがあったことは確かである。が、その歩みはすこぶる遅々としたものであった。

そのような状況を受け、宇根さんは2000年に福岡県を退職する。そして、NPO法人「農と自然の研究所」を設立し代表理事に就任する。「田んぼの生きもの調査」の普及、「田んぼの生きもの全種リスト」の作成や「日本版環境支払い案」の発表等の活動を進める一方で、「農業と環境」の問題が農業者間、研究者をはじめとするステークホルダー間で種々の行き違いが起きており、なぜ協働の運動として大きく発展していかないのかを問う日々でもあったようだ。友達のある学者が宇根さんの百姓仕事を見て「単純作業の連続ですね」と言う。「いや、私は単純作業とは思っていません。(中略)でも外から見ると単純作業としか見えない。内側から見ると草と会話したり、草に触ったり、本当に仕事に没頭して我すらも忘れるぐらいの境地になっているわけです。ここだと思いましたね。「内からのまなざし」と「外からのまなざし」、どちらも大事な

のだと。両者を出会せるような哲学が必要なのだ。農業の世界では両者を出会わせるような哲学が今までなかったのではないか。よし、それをつくってやろうと思いました。」（講演録から引用）と宇根さんは述べている。虫見板や生きもの調査などの実践活動には共感していたのに、わかりにくくなったと言われることの多い思想家宇根豊の出発点であっただろう。

思想家としての宇根さんのキーワードは、「内からのまなざし」と「外からのまなざし」、そして「両者が出会うところ」であることを忘れてはならない。例えば講演でも宇根さんが紹介した『愛国心と愛郷心』（農文協2015）には、124頁に「内からのまなざしと外からのまなざしの出会うところ」という表が掲げられている。「分類」「内からのまなざし」「両者が出会うところ」「外からのまなざし」という表頭が並び、「世界観」という分類に「天地」という内からのまなざしと「自然」という外からのまなざしが掲げられ、両者が出会うところが「生きていく場」とされる。このようにして、「生き方」「方法」「情感」・・・の出会うところがリスト化されるが、その場はすでに実現しているのではなく、「学の専門家」ではない、宇根さんのいうところの「野の専門家」の登場によって内からのまなざしと外からのまなざしとの橋渡しが行われ、新しい農本主義が生まれるところ（この表現は生硬すぎて内実が伝わらない。そこで「めぐみ返し」という表現をはじめて使うと宇根さんは述べている。）として探究が試みられて、作成された表と言えるものである。ぜひ一度ご覧になり、「野の専門家」の存在の可能性について思いをはせてほしいものである。

そのような探究をしてきた宇根さんが「みどり戦略にすごく期待しています。」と発言する言葉は率直に受け取っておきたい。そして、「どこに一番期待しているか」というと2050年の目標ということで、2050年という年代を挙げたことです。これもヨーロッパの受け売りかもしれませんが、少なくとも日本の農政で何年までにこうすると打ち出したのは多分初めてでしょう。（中略）2050年までにこうしますということは、2050年はどういう社会になっているだろうか。（中略）思い描くのです。このことが大事なのではないでしょうか。国民全体に、百姓全体に25年後はどのような社会になっているだろうか、どのような農業であるべきだろうかと思わせるきっかけとしてはなかなかよかったですと思います。」（講演録参照）と宇根さんは述べる。

国は2021年5月にみどりの食料戦略を決定公表し、2024年6月の改正食料・農業・農村基本法でも、基本理念として「食料安全保障の確保」が明確化されるとともに、「環境と調和のとれた食料システムの確立」が新たな基本理念として打ち出される。しかし、みどり戦略は、まだまだ地球温暖化対策、カーボンニュートラルというような「外からのまなざし」に軸足を置いた目標でしかない。それに対して、百姓一人一人が「内からのまなざし」でみどり戦略を肉づけして実現していくようなアプローチの仕方、道筋が求められていると前置きし、宇根さんは、「まず2050年の社会、私の見取図を簡単に話しておきます。農業は産業ではなくなっているのではないかと。なくなっていなければいけないのではないかと思います。かつて戦前の明治、大正、昭和期の農林官僚が考えたようなことにちょっと近いです。農業はほかの産業とは別なのだと、根本的に違うのだという考え方がもう一度花開く時代になるのではないかと思います。なぜならば、もう資本主義は終わるのではないかと結構言われています。(中略)もし資本主義が終わるとすれば脱産業化の社会になるしかないのではないかと。脱産業化は農業が手本になるしかないのではないかと私は思っています。(中略)つまり産業というのはどうしても生産という概念に捉われて、商品化という資本主義のシステムの中に組み込まれて、そして生きものが一番嫌がる競争という論理を押しつけてきます。競争することが一番人間性を駄目にしていく。悩みを増やしていく元凶ではないかなと思うのです。競争を求められると人間はすごく卑屈というか、つらいというか、傲慢になっていきますよね。競争のない社会というのを20年後に想像するのです。「それは宇根さん、あなたの夢想じゃないか」とよく冷やかされますけれども、夢想でもいいです。そういう社会を描いていくことが大事なのではないかなと思います。」(講演録参照)と、投げかけるのである。宇根さんが「今年も草が伸びる季節になって大変やね」と問うと、「何が大変なもんか、今年もまた草取りができる楽しい季節になった。」と答える隣のばあちゃんのように「内からのまなざし」を、「めぐみ返し」を投げかけるのである。

それに対して、宇根豊をはじめとする「野の専門家」をめざす者たちは、現在の農業がそれらと出会うところを探究していかなければならない。

また、生源寺眞一氏の「農業と福祉の連携。この辺りは障害者に限りません

けれども、農業そのものの意味合いというものが改めてクローズアップされる。こういう取組になっているのではないかなという感じもいたしました。そのことにも今日のお話はつながるというように受け止めました。」との最後のコメントは印象的である。